あとがき

大学時代の短期留学以来，これまで何度もフランスを訪問する機会がありました。そこで目にしてきたのは，フランスの人びとが，自ら，必死に生活のために闘っている姿でした。中でも衝撃的だったのが，モンペリエ大学に留学していた頃，ワインが売れずに困窮したブドウ栽培者のグループが夜中に大型スーパーマーケットに侵入し，ワインの瓶を叩き割ってまわり逮捕されたというニュースでした。大型店舗の棚が空になれば，多少は自分たちの在庫がはけるかもしれないと考えたようです。街には生産者やブドウ農家の窮状を訴えるビラがあちこちに貼られ，県庁や警察に向けて火炎瓶が投げ込まれるという事件もありました。もちろん，困窮しているからといって犯罪が許されるわけではありませんが，フランスワインのおしゃれでセレブなイメージが一変され，これがきっかけとなって，ワインを社会問題として考えるようになりました。

苦しい状況を行動によって，堂々とメッセージを発することによって打開していこうというフランスの人びとの発想は，昨今のパンデミック，ロシア・ウクライナ情勢を背景とする物価高騰下において，より明確に見ることができます。生活が苦しくなる中，フランスの人びとは，「デモ」「スト」を通じて，生きていくために闘い，賃金の上昇を獲得しています。他方で，日本では物価高騰に直面し，いかに生活に困窮しようとも，人びとは声をあげたり，具体的な行動に出たりすることは稀で，政府や行政の対応を待つだけに甘んじてしまい，その結果，諸外国との賃金格差は広がるばかりです。かつて「経済大国」といわれていた日本は，いつの間にか，若者から高齢者まで，多くの国民が貧しい生活を強いられる国になってしまったような気がしてなりません。急激な出生率の低下も，こうした状況と無縁ではないでしょう。「世間」の目を気にする日本人の気質が，憲法で保障されている正当な権利行使すらやりにくいものにしているようです。その対極にあるのが，まさにフランス社会ではないでしょうか。

新型コロナウイルスが猛威を振るい，オンラインでの遠隔授業を強いられて

いた2020年８月，菅原真教授および法律文化社の舟木和久さんから，今日のフランス社会における人権問題に焦点を当てたフランス憲法の入門書を出版できないだろうかという相談を受けました。以前，フランス法の入門書の刊行を志しながらも途中で断念してしまった経緯があり，今回は，なんとしても実現したいという思いでお引き受けさせていただくことにいたしました。幸運にも，小林真紀教授に編者に加わっていただき，さらに，佐藤修一郎教授，石川裕一郎教授，そして金塚オーバン彩乃弁護士にも執筆していただけることになりました。しかしながら，編者，執筆者とも，学内外のさまざまな業務に忙殺されていまい，原稿がなかなか出揃わず，一時は，出版が危ぶまれる厳しい状況に追い込まれることもありました。本書担当の舟木さんには，本当にご心労をおかけしました。辛抱強く，最後まで何度も鼓舞していただき，ようやく出版にこぎ着けることができました。心から感謝申し上げます。

2023年１月

編著者を代表して　**蛯原　健介**